

## 対人態度における好意感情形成のメカニズム

—従来の印象形成研究の批判を基礎に—

千 野 直 仁

### 問 題

我々が、ある人をひとたび嫌いになると、その人の良い面に気づきにくくなる。このような状況のもとで、その人との相互作用を続けねばならぬ時には、相互作用を通じて、その人に対する感情は、さらにネガティブになる可能性が強い。このような事態を避けるためには、我々が、人に対して全面的にネガティブな感情を持たないようにする必要があるのではなからうか。<sup>(注1)</sup>しかし、このことは、そのように言うのはやさしいが、実際に実行するとなると非常にむずかしい、故に、何らかの、具体的な、一貫した対策が必要とならう。ところで、「いかにすれば、我々は人に対して全面的にネガティブな感情を持たないようにできるか」を明らかにするには、「いかなる条件のもとで、対象に対するネガティブな感情が形成されるのか」—もう少し一般化すれば、「いかなる条件のもとで、対象に対する好意感情が形成されるのか」が、明らかにされねばならない。本研究では、このことを明らかにすることが、その目的となるが、対象に対する好意感情が形成される条件は、たくさんあると思われる、それらすべてをここで検討するわけにはいかない。ここでは、それらの中で特に重要であると思われる対象の属性に対する評定者の好意感情を主に取りあげて、検討する。

この問題に深いかかわりを持つ、印象形成関連文献において、印象形成の問題を最初に実験的に取りあげたのは、Asch (1946) である。彼は、いわゆる構造観の立場に立ち、中心一周辺特性の存在を証明した。これを筆者の問題意識に従って、印象の感情的側面のみに限ってみれば、次のように解釈できよう。すなわち、架空の人物の  $n$  個の属性 ( $X_1, X_2, \dots, X_n$ ) に対応する各属性に対する評定者の好意感情の評価値を ( $a_1, a_2, \dots, a_n$ ) とすれば、(1) 全体印象の感情的要素 (以下これを  $A$  と略す) は、刺激組 ( $X_1, X_2, \dots, X_n$ ) とは独立に測定された  $a_i$  ( $i=1, \dots, n$ ) の和からは、十分には予測できない。換言すれば、 $A$  の形成に際し、( $a_1, \dots, a_n$ ) は、

この文脈の中で、( $a'_1, \dots, a'_n$ ) に変化する。(2) 属性の中には、 $A$  の形成に際し、他の属性の評価値に対し、強い変容のインパクトを加えるものと、そうでないものが存在せる。ところで、彼の言う中心一周辺特性は、その由来がはっきりしないのが難点であるが、これに関しては Wishner (1960) が、中心一周辺特性は、Asch の用いた刺激リストとチェックリストとの特性間相関によって予測できることを示した。

それ以来、研究の流れは、いわゆる要素観の立場に立った Osgood (1963) の極性度 (polarity) ウェイトづけモデル、Fishbein (1965) の加算モデル、Anderson (1962) らの単純平均モデルなどの妥当性の検討に移っていったが、どのモデルによる予測の精度も、満足できるものとは言いがたい。そのような結果を反映してか、最近では、Anderson (1965)、Rokeach (1965) が、それぞれの視点から、複雑なウェイトづけ平均モデルを主張しているし、ごく最近では、Wyer ら (1969) や、Kaplan (1971) が、文脈の効果を研究しており、研究の流れは、Asch のいわゆる構造観から、要素観に、そして最近では、それら二つの折衷の立場に立った研究に移っている。しかるに、最近の研究では、予測モデルのパラメーターが多すぎる。このようにしなければならなくなった最大の原因は、Asch の提出した中心一周辺特性の意味の吟味不足にあると、筆者は考える。すなわち、日常場面の観察及び、彼の実験を、注意深く見直してみると、少なくとも印象の感情的側面に関しては、中心一周辺特性の意味に近い属性さえ操作的に押えられれば、主に、それらを含む別々に測定された各要素  $a_i$  ( $i=1, \dots, n$ ) の単純な和の情報のみから、Asch の主張に反して、 $A$  に対する相当満足できる予側が可能であると思われる。ところで、先述の Wishner の押えた中心、周辺特性は、いわば、たくさん  $S_s$  に共通なものである。しかし、日常場面では、「蓼食う虫も好きずき」の諺に示されるように、むしろ  $S$  に固有なそれらの方が重要であると思われる。故に、本実験では、日常場面の観察及び予備実験の結果から、それらに近い機能を持っていると思われた PWA (personally worst attribute) を主に操作することによって、前頁の最後に述べた予想を確かめるために、次の作業仮説を立てた。

(注 1) 換言すれば、我々は、ある人に対する部分的にネガティブな感情を、全体に一般化させないようにする必要があるのでなからうか、ということ。

仮説

架空の評定対象の五つの属性  $X_i$  ( $i=1 \dots 5$ ) を、 $S_s$  に同時に提示し、その属性を持った対象に対する好悪感情  $A$  を答えさせるという実験事態において、

(1)  $X$  の中に  $PWA$  が1つだけあり、それ以外の  $X$  に対する評価値  $a_i$  がすべて (かなり) ポジティブである場合には、 $A$  は  $PWA$  の評価値の影響を強く受け、単純平均モデルからのずれは、ネガティブな方向に大きくなる。

(2) 仮説(1)は、特に次の条件下でより強く支持されよう。

(2-1) 認知的に複雑な  $S_s$  に比べ、認知的に単純な  $S_s$  の時、(2-2) 評定対象が「同性の友人となる可能性のある人」に比べ、「恋人となる可能性のある人」の時。

(3)  $X$  の中に  $PWA$  が含まれず、 $a_i$  間の対比が小であれば、 $A$  は従来の単純平均モデルで十分予測されるだろう。

〈実験手続き〉女子短大生 152 名に対し、2 回の調査、実験を行なった。第一回目は、予備実験で得られた属性からランダムに抽出した 88 個の属性のそれぞれに対し、架空の評定対象が持っていたら好きになれる程度を 7 点尺度で評定させた。又、 $PWA$  測定のため、上の属性評定後に、尺度の両極の値が、それぞれ三つ以上ある  $S_s$  に対しては、両極のそれぞれにおいて最も極端なものから三つを選ばせた。さらに、認知的複雑性を Crockett (1965) の主張する測度でもって、すべての  $S_s$  に

対して測定した。第二回目は、一回目から 1 週間後に第一回目のデータをもとに、それぞれの  $S$  にとっての、 $X_i$  に対応する  $a_i$  ( $i=1, \dots, 5$ ) が、1 6 6 7 7, 1 5 6 6 6, (仮説(1)に対する刺激), 5 6 6 6 7, 3 4 4 4 5, (仮説(3)に対する刺激), その他, 1 6 7 7 7, 1 6 6 6 6, 2 6 6 6 6, 1 4 4 4 7, 2 3 3 4 7, 5 5 5 6 6, 1 2 2 2 3, 2 3 3 4 7, 2 2 2 2 6 である  $X_i$  ( $i=1, \dots, 5$ ) の組を 2 組選り出し、それら五つの属性を持った架空の人物に対する  $A$  を、一回目と同じ尺度で評定させた。

結果

仮説 (2-1) を除くすべての仮説が支持された。しかし、仮説 (2-1) については、結果は全く逆であった。すなわち認知的に複雑なほど  $A$  の単純平均モデルによる予測値からのずれは、ネガティブな方向に大きかった。 ( $p < 0.025$ )。さらに、すべての要因で  $A$  を予測した場合の予測の精度は、従来の単純平均モデルでの値、約 0.3 から、主に、 $RWA$  の要因の追加により約 0.5 に増加した。これらの結果の一部を表わしたのが表 1 から表 4 である。

注 2 以下、「 $PWA$ ・対比大」の水準と略す。対比の測度については、本実験では、評価値の分散に近い性質を持つある測度を用いた。

注 3 以下、「 $PWA$ ・対比小」の水準と略す。

注 4 これら三つを「 $PWA$ 」とした。実験では、三つのうちの一つを用いている。

表 1 単純平均モデルからのずれについて\*

評定対象	水準	ずれの平均値	S.D.	人数	t 検定**
恋人	PWA・対比大	-1.01	1.63	27	$p < 0.005$
	PWA・対比小	-0.35	1.38	17	Non. sig
友人	PWA・対比大	-0.58	1.40	20	$p < 0.1$
	PWA・対比小	+0.36	1.08	14	Non. sig

\* ずれ = 実測値  $A$  - 単純平均値モデルによる予測値

\*\*  $H_0$  : ずれ = 0

表 2 認知的複雑性 ( $C, C$ ) と、実測値  $A$  からのずれとの関係について、 $(a_1 \dots a_5) = (1 6 6 7 7)$  の時

ずれの大小	C. S	C. N	C. Co	計	$\chi^2$ 検定
大 (2~4)	5	8	15	28	$\chi^2 = 7.61$ d. f. = 2. $p < 0.025$
小 (5~6)	16	10	8	34	
計	21	18	23	62	

\*\*\* ( )内は、ずれが大とした実測尺度値が 2~4 (7 点尺度の)であることを示す。

表3 評定対象が友人, 恋人のデータ込みの場合の数量化Ⅱ類による相関比 $\eta$

要因の種類	要因*	相関比 $\eta^2$	$\eta$	偏相関係数
1	A <sub>1</sub>	0.34	0.58	$\rho = 0.35$ $\rho = 0.09$ $\rho = 0.11$
2	A <sub>1</sub> + A <sub>2</sub>	0.35	0.59	
3	A <sub>1</sub> + A <sub>3</sub>	0.47	0.69	
4	A <sub>1</sub> + A <sub>2</sub> + A <sub>3</sub>	0.48	0.70	

\* 要因 A<sub>1</sub>は, 予測値(単純平均モデルによる) 要因  
 A<sub>2</sub>は, 評定対象要因  
 A<sub>3</sub>は, PWA及び対比の要因  
 A<sub>4</sub>は, 認知的複雑性の要因

表4 評定対象が恋人のみの場合の数量化Ⅱ類による相関比 $\eta^2$

要因の種類	要因	相関比 $\eta^2$	$\eta$	偏相関係数
1	A <sub>1</sub>	0.33	0.58	$\rho = 0.37$ $\rho = 0.15$ $\rho = 0.20$
2	A <sub>1</sub> + A <sub>4</sub>	0.36	0.60	
3	A <sub>1</sub> + A <sub>3</sub>	0.48	0.69	
4	A <sub>1</sub> + A <sub>3</sub> + A <sub>4</sub>	0.51	0.71	

### 討 論

結果から明らかなように, 対象人物に対する好意感情は, 最近の研究の流れである複雑な  $a_i$  のウェイトづけ平均モデルを用いなくても, 又 Asch のいわゆる要素主義否定の立場を取らなくても, 主に刺激組 (X<sub>1</sub>…X<sub>5</sub>) とは独立に測定された各属性 X<sub>i</sub> に対する好意感情の評価値  $a_i$  の単純な和の情報及び筆者の操作した PWA という情報のみから, 相当満足できる予測が可能である。特に, PWA は, A の形成に際し, 他の特性の評価値に強い変容のインパクトを加えると考えられる点で, Asch (1946) の言う中心特性の意味に近い機能を持つ属性であると思われる。ただし, 操作的には, 両者は全く異なっている。又, Asch においては, いかなる特性が中心特性かが結果的にしか判明しないが, 筆者においては, 実際の結果から明らかなように, ある Ss 群においては, PWA が上述の意味に近い機能を持っていることが示唆された。さらに, PWA は, S に固有な属性であるという点で, Asch や Wishner の言う中心特性と異なる。

この PWA の重要度を, 別の角度から見れば, 単純なウェイトづけ平均モデルとして表現されよう。すなわ

(注5)  $a_i$  ( $i=1, 2, \dots, 5$ ) の単純平均を考えている。

ち, PWA の評価値にのみ重いウェイトをつけ, 他の  $a_i$  には軽い均等のウェイトをつければ, A は, 十分予測できると言えよう。このモデルは, 最近の複雑なウェイトづけ平均モデルに比べ, 簡単で, かつ, 予測の精度も高い。

次に PWA の効きの強さの個人差の要因として取りあげた認知的複雑性について見てみよう。結果は, 仮説とは全く逆であったが, 明らかに, ある条件下では, A と有意な関係を持っている。データを質的側面から分析してみても仮説と同じ傾向が窺えるし, 既に, Collin (1946) が筆者の仮説に近い結果を得ているしこれを考えると, Crockett の量的な測度の再検討の必要性を感じる。

次に評定対象の違いによる PWA の効きの違いを見てみよう。女子短大生である評定者にとっては, 対象が友人である場合よりも, 恋人である場合の方が, 自我関与は, 一般に強いと考えられる。この違いが, PWA の効きの強さの違いとなったと思われる。従来の研究では, このことはほとんど検討されていないと思われるので, さらなる検討が必要である。

最後に, 「問題」のところで述べた筆者の問題意識から結果を見た場合, 仮説(1)~(3)の条件下において A が形成されることが明らかになったわけであるが, 中でも注目値に値するのは, PWA の効きの明らかな個人差である。

## 昭和46年度修士論文概要

すなわちこの測度を十分検討したうえで、これに影響する諸要因を押えることができれば、我々は、PWAの、Aの形成に際しての効きの強さを少なくすることが可能になると思われるからである。